

Terrre des hommesの解釈について

徳 村 佑 市

サン=テグジュペリにとっては飛行機はあくまでも道具である。そしてその道具はそれを通じて人間が庭師や航海者や詩人の自然を見出すのに役立つ道具なのである。ところがそれがそう見えないのは我々があまりにも急速な機械、技術の進歩の中にあり、我々自身が新しい玩具が面白くて仕方のない野蠻人のようなものだからだと彼は説く。我々は飛行機の競争をやる。一機はより高く昇り、一機はより早くかける。そして我々は何故飛行機をかけさせるかという目的を忘れている。しかしこれは国家を建設しつつある移民にとって征服そのものが重要に思われるのと同様なのであつて、その征服の目的が移民を落ちつかすことにあるように、飛行機も又我々にとっては手段であり、道具なのである。そしてその道具は人間の累積した努力の結果として女の乳房や、海がみがきあげた小石のような単純で自然なものに近づき、我々に機械そのものを忘れさせるに至る。我々が心臓の鼓動に注意を払はないように、我々は発動機が回転するものだということを忘れかけている。それほど発動機は回転するという職能を果すようになってきたわけだが、こうして我々は注意力を道具のために損われることなく、道具を通じて昔ながらの自然を見出すことが出来るのだと彼は説く。

このように飛行機は自然を見出すのに役立つ道具なのであるが、しかし何という分析の道具であろうと彼は言う。我々が歩く道というものは泉から泉へ、村から村へと通じているものであつて、それは不毛の地や砂漠をさけて通るものなのであり、たまたま砂漠を通ることがあつても、それはオアシスに会するために幾度となく迂回するものなのである。そのため我々は自分の住む地球を美化して、それが湿潤なものであるかのような、あやまつた観念を抱くに至つているのである。ところが飛行機という道具を知り、それに乗つて飛び立つて、町から町へ、水飼場から家畜小屋へとねりたがる道路をすてて直線コースを知つた時、我々は地表の大部分が岩石や、砂や、塩の集積であつて、生命は廃墟の中に生えのこる苔の程度に、そこかしこに花を咲かせているにすぎないのを発見する。サン=テグジュペリはプンタ・アレナス附近の無数の火口のあとが、時の経過とともに緑におおわれはじめている景観や、プンタ・アレナスの近くにある沼が月のエネルギーの作用をうけて海の脈をうつつている事実をあげて、まだほとぼりのさめきらぬ熔岩の上にかりそめに住みつき、気候に助けられ

て奇蹟的に文化の花を咲かせているが、早くも火山や、新しい海や、砂の風におびやかされている人間の営みのはかなさに目をむけている。それと同時に昨日ようやく火山から、芝生から、海の塩水から生れたばかりだというのに、もうなかば神的な人間の意識の奇蹟にも目を向けている。アルベレスが指摘する^①ように、鉱物の集積の上における人間の意識、夢の存在はたしかにサン＝テグジュペリが驚嘆をもつて描いたことがらであろう。彼は砂漠に不時着した一夜のことをえがいて次のように述べている。

「それなのに気がついてみると、僕の心は夢で一杯であつた。

夢は泉の水のように音もなく僕のところにやつてきた。そして僕には最初、僕を満してくれる心地よさが何であるかわからなかつた。そこには声もなければ、姿もなかつたが、ある *présence* の感情、きはめて身近かで、もうなかばそれとわかるような友情があつた。ついで僕はそれと気附いて目をとざし、記憶の楽しさに身を委ねたのであつた。

どこかに黒い縦と菩提樹の茂つた園と、僕の愛する古い家があつた。その家が遠かろうと近かろうと、ここでは夢の役割を果すだけになつて僕の肉体をあたためてくれることも、僕を保護してくれることも出来なくてもそういうことはどうでもよかつた。その家がその *présence* によつて僕の夜を満たすために存在しているだけで充分であつた。僕はもはや砂浜に墜落した肉体ではなくなつていた。僕は自分の位置を知つた。僕はこの家の子供で、その匂いの思い出や、その玄関のさわやかさや、その家を活気づけていた声で一杯であつた。そして沼でなく蛙の歌までがここまで僕を追いかけてきた。僕が自分自身を認めるために、この砂漠の味がどんな不在からできているかを知るために、鳴く蛙たちさへいないこの千の沈黙から作られた沈黙に一つの意味を見出すためにはこのようにさまざまな目標が必要なのであつた。」

ここで我々は彼に親しい考え方である *présence* という観念に出会う。*présence* というのは、自分の位置と進むべき方向を見出し、自分自身を認識している心の状態を云うのであつて、この *présence* の状態によつて、彼は夜の砂漠の中にうちすてられた漂流物の状態を脱して、自分自身を認識し、自分の位置を見出しているのである。^②たとえばイスラムの神を裏切つてキリスト教徒と手を結ぶことによつて、平和と大麦を得たが、自分には大切なすべてを失つてしまつたエル・マムーン^②の物語もこのことを示しているのではなからうか。エル・マムーンは年老いて、昔自分の住んでいたサハラが砂の一つ一つの褶に脅威をかくしていたこと、夜の火のまわりで敵の行動についての報告が人々の胸をおどらせたことを思い出

し、キリスト教徒と割の悪い契約をして平穏な牧者となつた自分にとっては、今こそサハラは真の砂漠であるのを見出すのであるが、この時彼は過去の思い出によつて磁化され、自分の位置と進むべき方向を見出している *présence* の状態にあるのであつて、こうした *présence* の状態にあるエル・マムーンはキリスト教徒の士官を夜中に殺害し、自分の過去の戦士としての栄光を再び求めながら砂漠へ脱走して行くのである。この場合エル・マムーンにとっては *présence* の状態、自分が現在キリスト教徒と手をつないで平和な牧者となり、昔の砂漠の戦士としての栄光を忘れていたのに気がつき、昔の砂漠の戦士としての思い出にとりつかれ、その栄光をなつかしみ、現在を悔んでいる状態は、彼を導いてキリスト教徒の士官を殺害し、砂漠へ脱走させて、アラブの戦士として彼の本来に立ちかえらせるのであるから、彼の心をしめた *présence* の状態は、彼を解放し、彼自身の本来に帰らせる *plénitude* の状態と密接な関係があると言はねばならない。このことについてはサン＝テグジュペリは又別の個所で次のように述べている。

「さらに一度僕は自分にはわからなかつた真実に接近した。僕はもう駄目だと信じた。僕は絶望の底にふれたと思つた。そして一度諦念をうけいれると僕は心の平和を知つた。こうした時に人は自分自身を発見し、自分自身の友となるものらしい。何物も我々の内部で我々には知られないある本質的要求を満してくれる *plénitude* の感情に勝つことは出来ないだろう。思うに風を追うて身を磨りへらしていたボナフはこの静謐さを知つたはずだ。ギョメも又雪の中でそうだったろう。僕自身にしても顎まで砂に埋もれて、じわじわと喝きに喉を締めつけられながら、星の外套の下であんなに心が暖かつた時のことをどうして忘れられよう。」

自分自身を発見し、自分自身の友となる状態が *présence* の状態であるとするれば、ボナフは風を追うて身をすりへらしていた時、ギョメは雪の中で帰還すべく努力していた時、又サン＝テグジュペリは砂の中に埋つて生還への努力を重ねていた時に、この *présence* の状態にあつたのであつて、その時彼らは何とも知られないが本質的要求を満してくれる *plénitude* の感情を味つていたのである。

以上の例から見てもわかるように、自分の位置と進むべき方向を見出し、自分自身を知る *présence* の状態はむしろ人間が人々から離れているとき、あるいはただひとりある時 ③ あらわれているのであつて、*présence* の状態が *plénitude* の状態と密接な関係があるとはいへ、そこには自ら制限が考えられねばならない。人間を解放してその本来の姿に立ち帰

らせた時あらわれるのが plénitude の感情であるとすれば、 présence の状態が plénitude の状態を導き出すことは我々の見た通りであるが、人間の plénitude の状態は又他の道を通つても達成されると言うことが出来よう。それはより正常な人間同志の関係の中に見出されることが出来ると言うことが出来よう。

人間同志の関係ということはサン＝テグジュペリが présence を強調したのと同じ熱意をこめて強調していることであつて、物質上の財宝のみを追うて働くのは、人がそこに孤独の自分をとじこめる牢獄をきづくことだ、金銭では生きるに価する何物をもあがのうことは出来ないとし、自分の思い出の中に生き甲斐を感じた忘れることの出来ない時間の目録をつくる時、自分が見出すものは、金銭では決してあがなえないメルモスのような男の友情や、ともに艱難をしのぐことによつて結ばれた友の友情だと言い、真の贅沢はただ一つしかない、それは人間関係の贅沢だと言つている。このように彼は人間同志の関係を重んじているのであるが、この問題については彼が友人とともに解放してやつた奴隷のバークの物語が示唆に富んでいる。バークはサン＝テグジュペリやその友人達のおかげで奴隷の身から自由になり、愛される権利も、北へでも南へでも歩く権利も、自分の働きでパンをかせぐ権利も、すべて自由な人間がもつ重要な財産はすべて所有していたわけである。ところがこうして奴隷から解放されて自由になつてみると、自由なだけでは足りないで、深い飢のように、人間たちの中の人間、人間たちに結びつけられた人間になりたいという欲望を彼は感ずるのであつた。アガデールの踊子たちは老いたバークに親切にしてくれたが、彼は来た時と同じように気軽に別れて帰ることが出来た。それというのも彼女達は彼を必要としなかつたからである。又アラビア人の屋台店の売り子も往来の通行人もみな彼の中に自由な人間を尊敬し、彼と平等に太陽の光を分かちしたが、誰も彼を必要としたものはなかつた。彼は隷属の身分から解放されて自由になりはしたが、自分の重量を地上に感じないほど自由になりはしたが、その彼には、気儘な歩行を妨げるあの人間関係の重みがかけていたのであつた。人がある行動をしようとする時にそれに附随して起る、涙、別れのかなしさ、非難、喜びなどの、人を他の人間に結びつけて重々しくするあの無数の人間関係が欠けていたのであつた。そしてバークはこの自分に欠けている人間関係、人間達の中の人間、人間達に結びつけられた人間になりたいという深い飢を満すために、附近にいる子供達に贈り物をし、人間関係を作り出そうとするのであつた。この年老いたバークの物語はサン＝テグジュペリの自由と人間関係との関係についての見解を知る上に示唆に富むものであると同時に、人間の本来のあり方がどこ

に求められねばならないかをよく示しているものと言えよう。

同じ人間同士の関係といつてもその間にはいくつもの段階がある。人は平素お互いに肩をならべて歩きながら各自の沈黙の中にとじこもっていることがある。あるいは言葉を交しはしても、それは何の意味もない言葉かもしれない。ところが一度危険に遭遇すると、人々はお互いに助けあい、自分達が同じ共同社会に属しているのを発見する。人は他人の意識を見出すことによつて自らを大きくする。お互いに微笑しながら見つめあう。そしてその時、人は海の広大さにおどろく解放された囚人のような気持になる。このようにして人々は *universel* なものにふれ、自分の小さな殻から出て、自己を実現し、 *plénitude* に達するのである。この人間関係の高さに達すると、同情はもはや意味をなさない。同情し、同情されることはまだ二人に分割されていることであつて、この高さに達すれば同情も感謝と同様に意味をなさないのである。そしてここに於て人は解放された囚人のように息をつくことが出来るのである。サン＝テグジュペリがスペインの内乱の時、マドリッドの前線で出会つた一人の軍曹は元バルセロナの貧しい会計係で、仕事を終えて帰宅しても孤独であつたのに、志願して兵士となつてこの前線にあつては、自己を完成し、 *universel* なものにふれている。この軍曹は出撃を命ぜられたのだが、それは種まきのためのもつかみの穀物が穀倉から選ばれるようにえらばれたのであつて、選ばれて出撃を命ぜられた軍曹も、残る兵士達も共同の運命をになつているわけである。その共同の運命をになつている共同体の中から出撃する役割が軍曹にふりあてられたのであつて、残る兵士達はあとに残つて、次の攻撃にそなえる役割をふりあてられているわけである。いわばお互い同士が危険をわかちあつているのであるから、したがつてあとに残る兵士が出撃の時間を知らせるために眠っている軍曹を起すとき、彼らは軍曹に同情したりしない。軍曹も残る兵士も共同の運命の別の役割をになつているにすぎないからである。こうした一つの *universel* な世界に目ざめる時、軍曹はより大きなものの一部となり、自己を実現する気持を味い、解放された囚人のように *plénitude* の気持を知るのである。このように *plénitude* は人間関係の高い段階、同情も感謝も意味をなさないような一つの *unité* に達し、 *universel* なものに加わつた時にあらわれるものであつて、サン＝テグジュペリは *présence* と同様このことをも強調しているのである。

以上見てきたように人間をさまざまな隷属の状態から解放し、自己自身の本来の姿を実現させる *plénitude* の状態は、*présence* の状態と同様人間関係の高い段階に於ても達成せられるのであつて、こうした *plénitude* の状態に達すること、人間を因習やその他さまざまの

隷属の状態から解放し、その本来の姿に立ちかえらせることが又この*Terre des hommes* という書の主題となっているのである。我々はこれから各章についてそのことを一々検討して行きたい。

第一章では作者は自分の初飛行の朝、自分を飛行場へとはいこんでくれる古ぼけた乗合自動車のことを思い出し、乗り合わせた年老いた役人たちの会話、病気のことや、お金のことや、世帯の苦勞のことなどに関する彼らの会話を耳にして次のように彼らに語りかける。

「年老いた役人よ、現在ここに於ける僕の仲間よ、何物も決して君を脱走させなかつたし、又君はそれには責任はない。君は白蟻がするように、光明へのあらゆる出口をセメントで無理にふさぐことによつて君の平和を建設した。君は自分のブルジョア流の安全感のうちに、君の習慣のうちに、田舎生活の息づまりそうな儀礼のうちに身をまるくしてもぐりこんでしまったのだ。君は風や潮や星に対してこのつつましいとりでをきづいた。君は大きな問題に気を勞することを望まなかつた。君は君の人間の条件を忘れるのにさえ大いに難儀をしていたのだ。君は答のないような問題を自分に問いかけたりしない。君はツールーズの小市民なのだ。何物もまだ間に合う時に君の肩をつかみはしなかつた。今では君をかたちづくる粘土は乾いて、固くなつてしまつて、今後は何物も君の中に最初は住つていたであろう、眠れる音楽家を、詩人を、天文学者をよびさますことは出来ないであろう。」

そして作者はこのようにブルジョア流の安全感のうちに、自分の習慣のうちに、田舎ぐらしの息づまるような儀礼のうちに身をまるくしてとじこもつてしまつた一般人の生活に対し、風に、潮に、星に対してひらかれた飛行士の生活を対比する。

「自分の地所を巡つて、さまざまな兆によつて春の近づき、氷結の脅威、雨の前ぶれを見てとる農夫のように、職業操縦士も又雪のきざし、濃霧のきざし、多幸な夜のきざしを判断する。最初彼をそれから遠ざけるように見える機械は更に一層の厳格さをもつて彼を自然界の大問題にしたがわせる。自分に向つて暴風雨の空が結成する広大な法廷のまつただ中にただ一人立つて、この操縦士は自分の郵便物を山と海と嵐という三つの基本的な神々に対して争うのである。」

職業飛行士の前には、風や、潮や、星に対して身を小さくしてもぐりこめるようなとりでは何もない。彼は飛行機という道具を厳格に驅使しながら、太古以来の自然に立ち向わねばならない。こうして職業飛行士は職業の法力によつて自分をしばる因習から解放されて自然を探究し、自己自身を知る機会にめぐまれるのである。

第二章ではアンデス山脈の中で遭難し、困難を克服して生還したギョメの物語が感動的である。彼は破損した飛行機をあとにして、登山杖も、綱も、食糧も持たずに、四千五百米の高い峠を越え、絶壁に沿うて、氷点下四十度の寒気の中を生還へと向つて五日と四晩歩きつづけたのである。彼は少しずつ全身の血を、力を、意識を失いながら、あらゆる誘惑にたえて蟻のような執拗さで前進をつづけた。雪の中では自己保存の本能は全く失われてしまう。二日、三日、四日と歩きつづけていると人はただ睡眠だけしか欲しくなるものである。こうした誘惑にたえて彼が歩きつづけたのは、彼の言葉によれば、彼は自分の妻がもし自分がまだ生きているものだと思つているとしたら必ず自分が歩いていると信じているに違いない、友人もそう信じているだろう、皆、自分を信じていてくれるのだ、それなのに歩かなかつたりしたら自分は意気地なしだと心の中で思つていたからである。一度彼は雪の上に倒れて起き上るのをあきらめかけたことがあつた。平和になるには、この世界から岩石や、氷塊や、雪塊をなくしてしまうためには目をとじるだけで十分であつた。彼はモルヒネのように身体を快感で満してきた寒気を味いはじめていた。そのまま行けば、彼は急勾配の斜面に腹這いになつたまま凍死して、夏がきたら雪解けの泥に運び去られて、幾千とあるアンデスの山の沢の一つの奥へ転落してしまうはずであつた。その時良心の奥から動揺がわき出し、彼は妻のことを考えた。自分がここで死んでも自分の保険証書が妻を窮乏から救つてくれるだろう。だが失踪の場合には法律上の死の認定は四年後になる。五十米先に一つの岩角が雪の上からのぞいているので、そこまで行つて岩を支えにして身を当てがつておいたら、夏になつて誰か発見してくれるかもしれないと彼は考えて起き上つた。そして一度起き上ると彼は三日二晩を歩きつづけたのであつた。このアンデスの山中で遭難し、寒気と睡魔にさいなまれながら凍死の寸前をさまよつていたギョメにとつて、彼の妻のことや、彼の身の上を心配してくれる友人のことがいかに大きな支えになつたことだろうか。凍死の寸前をさまよう彼に、自分の位置と進むべき方向を示したものはこの *présence* の状態であると言いつたのではないだろうか。さらにさけた筋肉や、焼けつくような凍傷や、山車よりも重く感ぜられる生命の重荷をひきつづけて牡牛のように歩きつづける *présence* の状態にある彼に責任感が来て加わる。それは自分がたがやさなかつたら地球全部が荒蕪地となるように感ずるあの庭師の責任感である。待つている妻や友人達の期待にそむかないために、彼らを悲嘆のどん底から救うために生還しようとする責任感にこの *présence* の状態は裏打ちされている。こうして生還した彼の口から洩れるのは、人間をそのあるべき位置に据えて榮譽あら

しめ、真の階級を決定する、「僕はちかつていうが、僕がしたことはどんな動物も決してしなかつたであろう。」という言葉であつた。

第三章と第四章についてはこの小論の冒頭で簡単にふれたから省略する。

第五章ではアルゼンチンのコンコルディアという所での短い滞在について語られている。野原に着陸したサン＝テグジュペリはある家へ招ぜられる。その家は夫婦と娘が二人いる家であるが、作者はこの古い荒廃した家に魅せられてしまう。掃除はゆきとどいていて、すべてが清潔であつたが、床板には大きな穴があき、船のタラップのようにぐらぐらするのだつた。その床板の穴は時間の仕事であつて、それにはあらゆる言いわけを頭から軽蔑する王者のような風格があつた。家人も説明をいさぎよしとせず、鷹揚に、「少々荒れていますが……」と言うだけであつた。客間からすでに物置部屋の豊富さがあり、戸棚をあけたら、黄色くなつた手紙や曾祖父の頃の領収証の束や、多くの鍵が飛び出してきそうだつた。そしてその家の娘たちもまた作者の心を魅するものを持つていた。彼女達は大蜥蜴を一匹、マングースを一匹、狐を一匹、猿を一匹、その上密蜂までも飼つていて、動物達の心をよく見分けることの出来る鋭敏な目でサン＝テグジュペリを見つめるので、彼は二十点満点の十一点をつけられはしないかとおそれて彼女達の歓心をかおうとするが、虚栄心を知らない彼女達には通用しない。彼女達はサン＝テグジュペリの股間でおどる蝮によつて彼を試してみても満足するような娘たちである。作者はこれらのことを思い出しながら次のように言う。

「今日、僕は夢のように思い出す。こんなことも今では遠い昔になつてしまつている。あの二人のフェアリーたちはどうなつたことだろう。多分彼女達は結婚していることだろう。すると彼女達は変つただろうか。娘の状態から女の状態にうつるのは大変重大なものである。彼女達は新しい家の中でどうしているだろうか。雑草や蛇に対する彼女達の関係はどうなつただろうか。彼女たちは *universel* なあるものにまじつていたのだつた。だが娘の中に女が目ざめる日がやつてくる。するとしきりに十九点がやりたくなる。十九点が心の奥の重荷になる。その時一人の馬鹿者があらわれる。あんなにも鋭かつた眼力が生れてはじめて見あやまつて彼を美しい色彩でてらし出す。その馬鹿者が詩を口にすれば、彼を詩人だと思ひこんでしまう。彼が穴のあいた床を理解し、マングースを愛すると思う。食卓の下の脚の間で、蝮が尾を振るほどの心易立てを彼がうれしがるものと思ひこんでしまう。そして人工的な手入れのゆきとどいた花園しか愛さない彼に、天然の花園である自分の心を与えてしまう。そして馬鹿者は *princesse* を *esclavage* にしてつれ去るのである。」

ここにサン＝テグジュペリのフェミニストとしての表白を読みとるのはあやまりである④。虚栄を知らない彼女達は動物達にかこまれて *universel* な世界にふれている。それを結婚によつて無理解な男性に結びつけられ、*universel* なものにふれていた *princesse* の状態から *esclavage* に転落するかもしれないことを嘆いているのである。虚栄を知らず、因習の束縛を知らぬ自然のままの状態から、因習の中にひきこまれ、奴隷の状態にひきこまれるかもしれないことを作者は惜んでいるわけなのである。そして *universel* なものにふれている娘たちの状態を愛惜し、因習に隷属してゆくことをかなしんでいる点で、この章も又、あらゆる因習の隷属から人間を解放して、*universel* なものに、*plénitude* にふれしめることを強調しているこの作品の主題につながるのである。

第六章ではサン＝テグジュペリ、その他の人々の協力によつて奴隷の身分から解放されたバークの物語が感動的である。著者はアフリカの砂漠で、モール人達にとらわれて奴隷となつている土民たちを見かけるのだが、その多くの者は、かつて自分の裡に住んでいた自由人である黒い王様を否認して奴隷の身分に安住し、幸福な虜囚以外の何物でもなくなつている。夕方の涼しさがやつてきて、暑熱から解放されて親切な気持になつた主人が一碗の茶を与えると、奴隷はこの一碗の茶のために主人の膝に接吻さえするのである。こうしてモール人にとらえられた奴隷たちは、主人の厚意を奴隷の喜びとする幸福な虜囚以外の何物でもなくなつている。ところがサン＝テグジュペリの知つたバークは、こうした運命に抵抗した、彼の知るかぎりの最初の男であつた。モール人たちが彼をとらえ、一朝にして彼の自由を奪い、生れたての赤ん坊以上に裸にし、彼の財物以上に彼の人格を深く傷つけたのだが、それでも彼はあきらめなかつた。他の奴隷達が心の中で死ぬにまかせておいた貧しい家畜追ひ、口を糊するために一年中働きつづけねばならない貧しい家畜追ひを心の中に生きつづけさせていた。人がよく待ちくたびれて平凡な幸福に安住するように、奴隷の身分に安住し、主人の親切を奴隷の喜びとはしなかつた。彼はとられる前は家畜追ひでモハメッドという名前であつた。そして今は不在のモハメッドのために、このモハメッドがかつて住んだ家を自分の胸に大切に保存していた。このように奴隷の身分に落されながらそこに安住せず、決してあきらめたり、抛棄したりしない点では、アンデスの雪の中にとざされ、寒さと飢にさいなまれながら、最後まで断念せずに生還したギョメと似ていると言えよう。彼は「わたしはモハメッド・ベン・ラウサンです。」とは言わずに、「わたしの名はモハメッドでした。」と言つた。そしてこの忘れられた人物が蘇生して、自分の奴隷の身を追い払ってくれるのを待つて

いるのであつた。夜中にはよく故郷のマラケシの事を話して泣くのだつた。彼のうちに以前の彼が突然目ざめ、自分の手足の中で背伸びをし、どんな女も一度もパークに近づいたことのない砂漠の中で自分の傍に女を尋ね、どんな泉も湧いたことのないところに泉を尋ねるのであつた。するとパークは目をとじて、人々が粗末な毛織物の家に住み、風を追うている砂漠の中に住みながら、故郷の白い家に住み、毎日同じ星の下に住んでいると信ずるのであつた。そして蘇ってくる昔の愛情を身につけて、自分の用意が出来ていること、自分の愛情もすべて用意が出来ていること、それを分配するためにはただ家へ帰るだけで十分なことを告げるためにサン＝テグジュペリのところへやつてくるのであつた。このように過去の思い出によつて磁化され、自分の位置と進むべき方向を見出しているパークは、モール人達の奴隷として、その身分に安住してしまつた黒い漂流物ではなくて、*présence* の状態にあるものと言うことが出来よう。ギョメがアンデスの雪の中に倒れて、そこに断念と抛棄の目をとじてしまわなかつたように、このパークも *présence* の状態に支配され、奴隷の身分に安住することなく、自由になることを求めつづけたのであつた。そのせいか、サン＝テグジュペリはこのパークを自由の身にしてやろうと試み、友人達の援助をうけて、パークをモール人達から買いとることに成功する。そしてパークを彼の夢に見た故郷へ送りかえしてやるのだが、こうして奴隷の身分から解放されて自由になつたパークは、まづ愛される権利も、北へでも南へでも自由に歩く権利も、自分のはたらきでパンをかせぐ権利もすべて手にしたわけであるが、さてこうして自由になつて、万人と太陽を平等にわけあうようになつてみてはじめて、深い飢のように彼が感じたのは、他人から必要とされる、人間達の中の人間、人間に結びつけられた人間となりたいという欲求であつた。そのために彼は貰つた金を投じて附近にいる子供達におくりものをし、この地上において彼を人間達に結びつけるきづなをつくり出そうとしたのである。ここに人間のあるべき姿についてサン＝テグジュペリの抱いている考えがあらわれているのだが、それについては前にのべた通りである。

第七章ではサンニテグジュペリとプロヴォがリビアの砂漠に不時着し、砂漠の虜囚となりながら、最後まで断念せずについに生還した物語が力強く語られている。この章を読むと我々は「鉱物の世界」だとか「鉄の風景」といつたようなイメージにしばしば出くわす。すなはちサン＝テグジュペリとプロヴォは生命の存在を拒絶し、それに敵意をもつような鉱物の世界、鉄の風景の中におちて、そのとらわれとなつたわけであつて、このとらわれの身から脱出して、「生命」の方へともどるのがこの物語で語られていることである。ここでも又アン

デス山脈の中で雪にとざされたギョメに起つたと同様のことが語られている。ギメヨはアンデスの雪の中にとざされて、自分の妻や親しい友が、もし自分が生きているならば歩きつづけているにちがいないと信じているだろうと思つて勇気をふるい起して歩きつづけた。ここでもサン＝テグジュペリは自分の妻や自分に親しい人々の目を見るような気がする。そしてそれらの目は質問し、自分の沈黙を責めているように感ずるのである。又、アンデス山脈の雪の中でギョメが倒れて再び起きる気力を失いかけた時、眠りこもうとする良心の底から妻のことが思い出されて、妻のために再び勇気をふるい起して起き上つたように、そのように、不思議な役割の顛倒がここであらわれる。生命に敵意を持ち、それを拒む鉱物の世界におち、鉄の風景の中にとじこめられ、喝きのとりことになりながら、サン＝テグジュペリは自分がそのような砂漠の虜囚であるような気がしない。かえつて彼方の安全な所で彼らの身を気づかっている人々、彼らの沈黙について心配し、彼方で絶望の声をあげている人々の方がかえつて難破しているように見え、その人々を救うために、その人々の方へかけつけて行きたいという衝動にかられるのである。ここには砂漠の中に彷徨し、鉱物の世界、鉄の風景の中に閉じこめられ、奴隷商人によつて奴隷船につながれたような一個の漂流物から脱して、自分の位置と方向を知り、生還へと向つて脱出しようとしている *présence* の状態が見られる。これは又アンデスの山中にあつて、絶望的な状態の中から決して断念したり、放棄したりせずあらゆる困難にうちかつて生還したギョメに比肩することが出来るし、又一方ではモール人の奴隷となりながら、他の奴隷たちのように奴隷の身分に安住することなく、運命に抵抗し、ついに奴隷の状態から解放されたパークのあり方にも似ていると言えよう。サン＝テグジュペリはこうした自分の経験をかえりみて、自分は助らぬものと信じ、絶望の底にふれ、諦念した時、自分は心の平和を知り、自分自身を発見し、自分の真の友となつたと言つている。このように自分自身を発見し、自分の真の友となる *présence* の状態にあつた時、彼はそれまでは自分には知られなかつた、何ともしれないある本質的欲求を満してくれる *plénitude* の感情に満されていたのであつて、この *plénitude* の感情にまさるなものもないほどなので、この *plénitude* の感情が得られた状況が客観的に悲惨な状況であれば、その悲惨な状況をもなつかしむほどだと言つている。そしてこうした *plénitude* の感情、こうした一種の解放はどのようにして助長されるかを自問しながら、我々を豊富にしてくれる未知の条件があるということ以外には我々には何も知られていない、人間の真理はどこに宿つているのかと問いながら次のようにのべている。

「真理というものは論証されるものではない。もしこの土地に於て、そして他の土地においてではなく、オレンジの木が丈夫な根を張り、実を結ぶならば、その土地がオレンジの木の真理なのである。もしこの宗教、この文化、この価値の階梯、この活動の形が、そして他のものでないものが、人間においてあの plénitude を助長し、彼の中に知られずにいた王者を解放するとすれば、その価値の階梯、その文化、その活動の形が人間の真理なのである。で理論は。理論は人生を理解するために何とか苦勞すればいいのである。」

この第八章ではサン＝テグジュペリは前述のすべての章をふりかえつて、自分はこの書では至高の天職に従った数人の人々、即ち砂漠や航空路をえらんだ人達についてのべてきたことを言い、これらの人々を賞讃するように読者に強いるとすれば、自分の目的を裏切るものだと言っている。たとえばある商店主は難破や火災の晩に、彼らには自分にも思いがけない偉大な働きをするが、そこで彼が味つた plénitude の感情は長つづきせず忘れられてしまう。しかし新しい機会や、適当な土地や、厳しい宗教があれば、平凡な人々でもこうした plénitude を味い、自己自身を実現し、解放感にひたることが出来るのであるとし、これまでの数章ではとくにめぐまれた幾人かの人について語つたので、ここでは万人について語りたいと言っている。ここにこの書の主題が明瞭にあらわれているのであつて、この書物があらゆる隷属から人間を解放し、自己自身を実現する plénitude を強調しているものであり、第一章から第七章までは航空路や砂漠をえらんだ特定の人々についてのべ、第八章はそのしめくくりとして万人の場合を問題としているその構成も読みとることが出来る。

そしてその万人の場合の一例として、スペインの内戦の時マドリッドの前線で会つた一軍曹の例をあげ、次のように言っている。すなわちこの軍曹はもとはバルセロナのどこかの貧しい会計係で、国が分裂していることも、政治のことにも余り関心を持たないで過していたのだが、それが志願して内戦に加わるようになった理由についてサン＝テグジュペリは次のような例をあげて説明している。野鴨が移住の季節になつて空を渡ると、それらが見下す地上では、家鴨たちが野性の呼び声によびさまされて、なれない飛翔を試みようとする。つまり水溜りや、みみずや、小屋のことしかなかつた小さな頭の中に急に大陸的なひろがりや、沖の風の味いや、海の地理学が展開し、家鴨は一時的に渡り鳥となるのである。又サン＝テグジュペリらがジュビーでかつていた羚羊は、小さい頃砂漠でとらえられて、罎の中に入れて飼われているのだが、ある時期がくると砂漠の方に向つて柵を押すようになる。小さい時にとらえられて、砂漠の味も、雄のことも知らないのだが、そうして砂漠への出口を求

めて柵を角でおしつづける日がくるのである。こうした羚羊はいわば磁化されているのであつて、自分を完成し、自分自身を実現するひろがりを求めているのである。こうした羚羊にせよ、家鴨にせよ、いわば *présence* の状態にあるのであつて、自分自身の位置と方向を見出し、自分自身を認める状態にあるのである。こうした家鴨や、羚羊の例のように、バルセロナのどこかで貧しい会計係をしていた彼が、一人、二人と友人が志願して内戦に赴くのを見、その友の戦死の知らせをきいた時、その知らせが彼の狭い運命の上を海の風のように通りすぎたのである。すなわち野鴨の飛翔を見て家鴨の小さな頭の中に大陸的なひろがりを展開したように、又時期がきて羚羊が磁化されて、自分自身を実現する砂漠の広がりを求めるように、彼自身も磁化され、自分自身を実現するひろがりを求めて内戦に加わつたわけである。そしてマドリードの前線では同情も感謝も意味をなさないような人間関係の高みにふれ、解放された囚人のように息づいている。というのは軍曹が出撃の危険を進んでひきうけるのはお互い同士のためであつて、そこには言葉をもはや必要としない一致があるのである。お互い同士がお互い同士のために危険をひきうけあつているのであつて、こうした人間関係の高い段階にあつて、軍曹は自己を実現する *plénitude* の感情を味い、*universel* なものにふれているのである。

そしてサン＝テグジュペリは次のように言っている。

「我々の外にある共通な目的によつて我々の兄弟たちに結ばれる時、その時にのみ我々は息がつける。経験は、愛するということはお互に見つめあうことではなくて、一諸に同じ方向を見ることだと教えている。そこで再会すべく、同一の頂きを目ざして同じロープの列に結ばれる場合にのみ仲間というものがあるのである。でなければ、この万事につけて都合のよい世紀にあつて、どうして我々は砂漠で最後の食糧をわけあつて、胸一杯の喜びを感じたりするであろうか。それに対して社会学者の推測など何の価値があるだろうか。我々の中でサハラ砂漠における応急修理の際の大きな喜びを知つたすべての人々にとつて、他のすべての楽しみはとるに足らぬものに見えたのだつた。」

そして今日我々の周囲で、人々がこの *plénitude* を求めて軋み出し、各自が自分にこの *plénitude* を与える宗教に熱中している。言葉はちがうが、皆同じ *pléuitnde* を求めているのであつて、それに達する方法は異なるが目的は一諸だと言ひ、この同じ目的を追求し、人間とそのさまざまな要求を理解するためには、又人間をその本質的なものによつて知るためには、各自の持つ真理を対立させあつてはいけない。何故なら、それらの真理は対立

させられるならば、多くの対立と、それから由来する狂信までも生ずるからである。人は人間を左翼と右翼、ファシストとデモクラートなどにわけ、それぞれ自己の真理を主張することが出来ようが、人間をその本質的なものに於て知るためにはこうした区別は一時忘れねばならないと言ひ、真理というものは混沌をつくり出すものではなく、世界を単純化するものであつて、ニュートンがしたように、牧場に落ちる林檎を表現しうると同時に、太陽の昇ることをも表現しうる普遍的言葉を見出す創造的なものであると言つている。

そしてここで現代の問題にふれ、現在のヨーロッパには二億の意味のない人間が更生しようと願つている。工業が彼らを農民としての伝統からひきはなして、黒い貨物の列が混雑している巨大なゲットーの中にとじこめてしまつた。先駆者の喜びも、宗教的な喜びも、学者の喜びもすべてうばわれた彼らは、労働者街の奥から目覚めることを望んでいるのだと言ひ、これに対する解決法としてとられる、たとえば戦争という手段は、なるほどそこで戦友を見出し、パンを分かちあひはするが、そのさし出されたパンのおかげで人は死なねばならなくなる。又その上に現代の戦争そのものでは、戦友とパンをわかちあう喜びよりも破壊的要素が大きくなつていと言ひ、砂漠になつてしまつた世界の中で友を見出すためには必ずしも戦争を必要としない、憎悪は創造的な何物をも加えはしないし、それに何よりも先づ我々は地球という船の同じ乗組員だ、新しい綜合を作り出すために各種の文化が対立することは意味があるが、憎み合うのは言語道断だと言つている。

そして現代のこうした混乱から人間達を解放するには、我々をお互い同士結びつけるある目的を自覚するように仕向ければよいので、各自がこのお互い同志を結びつける目的の中で自分の役割を認識した時、我々は各自自分の生に意味を見出すのであり、自分の生に意味を見出すものは又自分の死にも意味を見出すのであると言つている。結局この書は、あらゆる隷属から人間を解放して、人間に plénitude を与えることを強調した書であるが、この最後の章では、巨大な工業の歯車装置の中にまきこまれて、意味を見失つている民衆をその隷属の状態から解放し、その本来の自己自身をいかにして実現せしめるかという問題にもつながつているわけである。この小論を終るにあつて、サン＝テグジュペリが人間の本来の姿と考へている二つのイメージをあげてしめくりとしたい。彼は人間の生に意味を与えるものはその死にも意味を与えと言つている。人間の生に意味を与えるものは自己の役割を自覚させるものであり、それによつて、しがたない家畜追ひも単なる下僕ではなく、地球全体に責任をもつ歩哨となるのである。サン＝テグジュペリが砂漠で解放してやつた奴隷のバーク

が、奴隷とされる前にあつたような姿、そして解放されてから自由になつた彼が再び戻つて行くべき姿がそれであろう。彼はそれを次のようにえがいている。

「するとパークはオリーブの杖を手にして彼らの移住を指揮したものだ。牝羊の大群の責を一手に任じて、生れるべき子羊のためにあまり早馳けするものを押え、怠け者には少々活を入れて彼は全員の信頼と服従にかこまれて歩いてきた。彼らがどんな約束の地に向つて登りつつあるか自分だけが知り、星々の間に自分だけが道を読み、牝羊たちの知るべくもない知識を重く身につけて、彼一人が自分の知恵において休息の時間、泉の時間をきめるのだつた。そして夜には彼らの眠りの中に立つて、このかよわくも無智なものを憐む心にかられて、膝まで羊毛に埋れたまま、医者であり、予言者であり、王であるパークは自分の臣民のために祈るのであつた。」

又第八章にえがかれている農婦の死の光景も又世代から世代へと伝えられていく生命の系譜として人間の本来の姿を示すものと言えよう。

以上見てきたように、この書は人間を隷属から解放し、自己自身の本来を実現させることを強調した書として、現代我々をとりまいてるところの、そして我々がそれに直面して悩んでいるところの問題をとりあげ、これをほりさげた現代の書ということが出来よう。

- ① R.-M. Albérés : Saint-Exupéry.
- ② cf. André Gascht : L'humanisme cosmique d' Antoine de Saint-Exupéry pp. 26.27.
- ③ Saint-Exupéry は *présence* の高い段階について次のようにのべている。

「祈っているドミニク教団の僧の中には濃密な *présence* がある。この人はひれふしてじつとしている時ほど人間らしいことはないのだ。顕微鏡の上に息をころしているパスツールの中には濃密な *présence* がある。パスツールは彼が観察している時ほど人間らしいことはないのだ。その時彼は前進している。その時彼は急いでいる。その時彼は動かないけれども巨人の歩みで進んでいる。そして彼はひろがりを見ている。同様に下絵を前にしてじつとして沈黙しているセザンヌにはこの上ない *présence* がある。彼は沈黙し、ためし、判断している時ほど人間らしいことはないのだ。その時彼の画布は彼にとつて海よりも広いものとなる。」(Pilote de guerre)

- ④ Jean Boullé はここで Saint-Exupéry の ironie と humour を読みとろうとしているが (Classiques Larousse) 私見のように解するのが妥当と思われる。